

全身性エリテマトーデス (SLE)

SLE は、自分の免疫細胞が誤って自分の組織を障害してしまうために起こる自己免疫疾患です。はっきりとした原因はわかっていませんが、何らかの免疫異常が原因と考えられています。また、環境因子や**遺伝的素因**も考えられています。

SLE の患者数は、全国で 6～10 万人いると考えられています。小児 SLE は、SLE 全体の 15-17%を占め、有病率は小児人口 10 万人当たり 3.9～4.7 であり、成人 SLE の有病率(6.6～8.5)と比較しても、それほど稀な疾患ではありません。男女比は 1：5 で、成人例の 1：10 と比べると小児 SLE では相対的に男児の比率が高くなっています。発症年齢は 10 歳以降が多いですが、7～8 歳頃から発症する例もみられます。

その名の通り、全身の組織や臓器に障害を引き起こします。発熱や倦怠感、皮膚症状、特に蝶形紅斑が特徴的です。臓器障害では**ループス腎炎**の合併が最も頻度が高く、成人に比べ小児では高頻度です。その他、脳や神経、心臓などにも障害を引き起こします。

症状と血液検査、尿検査の結果から診断されます。治療は、**ステロイド薬**を中心に**免疫抑制薬**など、症状や病勢に合わせて長期間の治療が必要となります。小児 SLE の 10 年生存率は 98%と昔に比べるととても良くなっていますが、病状が落ち着かない場合は臓器の障害が進行し、薬剤の副作用による問題も起こってくるために、より慎重な対応が必要となってきます。